

サ行活用動詞の音便

福島 直恭

はじめに

現代日本語では、東京方言をはじめとするほとんどの方言において、五段活用動詞の連用形に、助詞「て」や助動詞「た」がつく時、動詞の末尾音節に規則的にいわゆる音便¹がおこる。ただし、東京方言をはじめとする東日本の各方言や、大阪、京都など、多くの方言では、サ行五段活用動詞に限って音便形がみられない。動詞連用形の音便の発生時期は平安時代といわれるが、過去の文献にあたれば、このサ行五（四）段活用動詞にも「まいて（まし+て）」、「おびやかいて（おびやかし+て）」などイ音便化した例がいくつも指摘できる²。つまり、サ行五段活用動詞の音便形は、平安時代～現代の間に、発生→消滅の過程をたどったということである³。

小稿は、このサ行五段活用動詞になぜ音便形がない（あるいは消滅した）のかという問題を追究するものである。音便形が存在しないという点では、五段活用以外の動詞、すなわち、上一段活用、下一段活用、カ行、サ行の変格活用動詞もこれと同様であり、一括した説明が与えられることが望ましい。小稿の筆者の現在の見通しでは、サ行五段活用動詞と一段活用動詞に音便形が存在しない理由は、究極的には同一の方向でまとめ得られるのであるが、論証の過程は両者で大きく違っており、別々に扱うべきものと考えられるので、小稿では前者の問題のみを中心とする。なお、以下では、動詞の四段活用と五段活用とを区別せず、一括して五段活用と呼ぶことにする。

1 音便のはたらき

1-1

なぜ音便が起こらないのかという問題の考察は、なぜ音便が起こるのかとい

う点、つまり「音便のはたらき」を押さえた上でなされるべきであろう。音便を起こさない理由の第一として検討しなければならないのは、そこには音便の持つはたらきが必要なかったとか効果を発揮できなかったのではないかという可能性についてであるからである。

「音便のはたらき」に関しての先行研究の中で最も注目しなければならないものは、こまつ（1975）および小松（1981）に示されている“一語化、あるいは一単位化の融合の指標”というとらえかたであろう。動詞の音便に例をとれば、「聞きて」は鎌倉時代末以前は、二語の連接という形になっていたが、その同じ結びつきで頻繁に言いならわされているうちに、「聞き」と「て」は不可分の関係になり、語と語との境界が、事実上消失してひとまとまりとして機能するようになり、二語の融合の指標として音便が起こったと説明するものである。「音便のはたらき」をこのようにとらえる場合、小松自身も述べているように、“融合の指標”いう機能は、サ行以外の五段活用動詞（＋「て」や「た」）に対してのみ必要、あるいは有効というものではなく、すべての動詞に共通しているはずである。とすれば、サ行五段活用動詞に音便が起こらない理由をこの点にもとめることはできない。

1－2

さて、小稿の筆者は「音便のはたらき」として、“融合の指標”という機能的な解釈を支持するものであるが、ここでさらに音便の持つもう一つの側面も強調しておきたい。それは、音便形と非音便形が並存している場合、音便形は非音便形とは違った文体的な価値を有するといわれている点である。一般に言語の話し手は、ある情報を聞き手に伝達するに際して、情報伝達という観点からはその効果に大きな違いがないような複数の言語的手段を持ち合わせており、その複数の言語的手段の中からどれを選択するかということによって、第一義的な情報の伝達とともに、

- 1) 自分は誰で、どのような社会的なグループに帰属しているか
- 2) 聞き手との関係をどのようにとらえているか
- 3) 当該の発話の場面をいかなるものととらえているか

といったたぐいの言明、すなわち自己の社会的な位置づけ⁴を行っているのである。この場合の複数の言語的手段からの選択とは、いかなる特定の言語、方言を用いるか、またどのような語を選択し、どのように発音するかといったさまざまな領域に及ぶものである。そして、音便形と非音便形とが並存している

時代（あるいは地域）の言語においては、両形のうちのどちらを選択するかということも、そのような自己規定のための一手段であったととらえる視点が必要である。つまり、非音便形と並存している場合の音便形は、自己の社会的位置づけのための多様な言語的表現手段の必要性にこたえる、数多い要素のひとつであったわけである。特に、動詞や形容詞の連用形は、どのような種類のテキストの中でも高頻度に出現すると思われるので、音便形：非音便形の間の選択は、そのテキストの文体の特徴づけ、結局は話者の自身についての社会的な位置づけに関しての、効果の大きな要素であったと考えられる。ただし、それは音便形と非音便形とが並存していた時代にのみいえることなのは明らかである。そういう観点からいえば、例えば現代の動詞連用形＋「て」、「た」の場合のように、音便形だけが現れる段階に至ったものは、非音便形と並存していた段階とは全く異質の言語現象というべきものであろう。

両形が並存していた段階において、音便形は、非音便形と対比してどのような価値を有していたのかという点に関しては、従来、口語的な表現と説明されることが多い。しかし、ある特定の言語形式が持つ文体的な価値は、時代、場面をこえて一定であると考えざるべきではなく、ある特定の場面で使われた音便形は、その場面においては非音便形を用いるのに比べてこれこれの効果があつた、しかし、別の場面では別の価値を表現し得るというものであろう。これは例えば現代語の「ナウイ」という語の使用が、時代、場面によって『先進的』、『時代遅れ』のいずれをもその価値として表現し得ることからも明らかである。小稿の筆者は、以前、音便形の特徴である語中の母音音節、促音節、撥音節などと、漢字音との類似などから、音便形の使用がある時代のある場面においては、『先進性』というような付加価値を有していた可能性について述べたことがある⁵。

「音便のはたらき」のひとつとしての、音便形の文体的な価値という観点をあらためて見直すことは重要だが、サ行五段活用動詞に音便がないこととそれとを直接関連づけることは難しい。非音便形との並存が解消されている現代語はもちろん、音便形が衰退の方向をたどっていた時代の、その衰退をこの事実だけをもって説明することはできないであろう。サ行五段活用の音便形にも、非音便形との対比においての文体的な価値の表現は、他の行に活用する動詞と同様に可能だったはずだからである。

2 サ行動詞イ音便の傾向

2-1

前節では、「音便のはたらき」が、サ行五段活用動詞では不必要、あるいは無効であった可能性を検討し、それに対して否定的な結論に達した。本節では、まず、サ行五段活用動詞に過去に存在した音便形が、衰退、消滅の方向をたどったことに関する先行諸研究の述べるところをみていくことにする。

サ行五段活用動詞の音便に関する先行研究⁶は、ほとんどが過去の資料、あるいは現代の諸方言の調査を基にして、サ行イ音便の衰退の実態をあとづけ、その原因を考察するというものである。それらによると、サ行五段活用動詞のイ音便は、現れ方にある程度の規則性があり、次のような語は音便を起こさずに非音便形のみが現れる傾向があるという。

- ① 語幹末が長音である語→「申して」
- ② 二音節動詞アクセント第一類の語→「押す」「貸す」「消す」
- ③ いわゆる使役性他動詞→「言わす」「折らす」「立たす」
- ④ 語幹末母音がeである語→「消す」「減す」「召す」

先行諸研究のうち柳田(1985)は、従来指摘されていた①～④のような傾向に対して、ひとつひとつ再検討を加えている。まず①に関して柳田(1985)は、もしイ音便を起こして「申いて」となったら、長母音に母音が続く形となり、シラビーム言語後期にあたる中世では発音しにくかったとしているが、シラビーム言語後期には「申いて」がなぜ発音しにくかったのかという説明が不足している。さらに、柳田の論法はシラビーム言語期ではない時代には適用できず、従って少なくとも現代語の「申す」や「通す」が非音便形であることが説明できない。とにかく、①さらに④に関しては、該当する語の数が少ないのであまり確かなことはいえないように思う。

②の二音節動詞アクセント第一類の語に非音便形の語が多いという指摘に関して、柳田(1985)は、そのような傾向を認めるには例外が多過ぎ、アクセントの型とイ音便との間の相関性に対しては否定的である。ただしアクセントの型はともかく、二音節語に音便形がみられない語が多いのは事実であり、柳田はその理由をカ行イ音便形との衝突の回避という点に求めようとしている。つまり例えば、カ行活用動詞のイ音便形「置いて」とサ行活用「押す」のイ音便形「押いて」が同形となることを避けたものということであり、この解釈を裏付

けるものとして、ハ行五段活用動詞のウ音便(「思うて」)を挙げている。すなわち、ハ行動詞がイ音便を起こすとカ行動詞との音便形同士の衝突がおこるので、ハ行動詞はイ音便ではなく、ウ音便になり、例えば「解いて」と「問うて」のように、形態上の差異を維持しているというわけである。しかし、仮にハ行五段動詞がイ音便を起こしたとしても、カ行動詞との衝突がおこるのは「開いて」と「逢いて」、「書いて」と「買いて」、「解いて」と「問いて」、「掃いて」と「這いて」などの数対に過ぎず、その程度の衝突なら、言語の運用上致命的な障害にならないであろうことは、例えば「買って」と「勝って」と「刈って」のようなワ行とタ行とラ行の促音便や、「読んで」と「呼んで」のようなマ行とバ行の撥音便による衝突を許容している現代東京語のことを考えれば明らかであろう。それと同様に、仮にサ行五段活用動詞がすべてイ音便化したとしても、コミュニケーションに重大な支障が生じるといえるだろうか。筆者の調査では、現代語のサ行五段動詞に仮にイ音便が起こった場合、同音衝突となるのは、「書いて」「欠いて」「搔いて」:「貸いて」、「置いて」「於いて」:「押いて」、「咲いて」「裂いて」:「刺いて」、「炊いて」:「足いて」、「抱いて」:「出いて」、「向いて」:「蒸いて」など数対に過ぎず、アクセントの違いとか文脈の存在を考慮すれば、この程度ならば円滑な情報伝達を阻害する決定的な要因とはなりえないと思われる。

2-2

次に③の使役性他動詞に音便形がないという問題について検討する。柳田(1985)によると、大蔵流の狂言台本『虎明本』にみられるサ行五段の他動詞のうち、本来サ行五段に活用するもの(「済ます」「散らす」など)はイ音便形も現れるのに対し、使役性他動詞、すなわち本来は使役の助動詞「す」をとって、例えば「言わせ」とあるべきものが「言わし」となっている語には音便形がみられないとのことである。奥村(1968)では、使役性他動詞の中に、「言わし」のように活用語尾が(「言わせ」との間で)揺れている語が多いことが、イ音便化を妨げた原因であると述べられているが、なぜ「言わし」の他に「言わせ」の形もあるということが、「言わして」が「言わいて」にならないことの原因になるのかという重要な点についての説明が欠如している。

ところで、この「言わせて」と「言わして」は、現代語でも両形とも存在している。そしてその両形の違いを強いてあげるとすれば、前者には後者に比べてフォーマルな、あるいは書記言語的なニュアンスが付随しているのに対し、

後者には前者にくらべてインフォーマルな、あるいは口頭言語的なニュアンスが伴っているということであろう。すなわち、「言わせて」と「言わして」には、文体的な価値という点で違いがあるのである。そして、この両形の文体的な価値の違いは、おそらく中世における両形の間にも存在したものと考えられる。ここで1-2で述べた、音便形と非音便形との文体的な価値の違いという点に思いを至らせるならば、「言わせて」と「言わして」の関係と、非音便形「済まして」と音便形「済まいて」との関係を、文体的な価値の相違という点でパラレルなものにとらえることが可能になると思うのである。

<1>

文体A	文体B
「済まして」 (非音便形)	「済まいて」 (音便形)
「言わせて」 「言わして」	

<2>

文体A	文体B
「済まして」 (非音便形)	「済まいて」 (音便形)
「言わせて」	「言わして」

従来は、「言わせて」と「言わして」との文体的な価値の違いを考慮することなく、両者を<1>のように同じ位置を占め得るものとして扱っていた。しかし、小稿の筆者は、両者は<2>のように位置づけるべきものであることを主張したい。非音便形「済まして」と音便形「済まいて」の両形が一共時態内に並存することのメリットとして、1-2では“自己の社会的位置づけのための、多様な言語手段の必要性に応じるもの”ということを述べた。もしそうならば、「言わせて」と「言わして」、つまりは、現代の文法論における分析にのっとって言えば動詞に下一段型活用の助動詞がついて使役の意味を表す方式と、サ行五段に活用する使役的他動詞が、一共時態内に並存することも、それと同じ意義を持つものということができないのではないだろうかということである。

また、「言わせて」→「言わして」の変化を発音の面からみた場合、「言わせて」の「せ」([se])の子音を一拍分に引き伸ばしたものが「言わして」の「し」であるということができ、これは「死にて」→「死んで」や「立ちて」→「立って」という音便と類似の同化現象ともいえる。「死んで」が「死ぬ」と「て」との融合の指標となることができるといふのなら、「言わして」も「言わせる」と「て」との一単位化に対して同様の役割を果たしているということが可能ではないだろうか。この点からも「言わして」の方を音便形になぞらえることの妥当性を主張できると考えるのである。ただし、少なくとも現代語では例えば未然形にも「言わせない」が五段活用化した「言わさない」の形も存在するし、

終止連体形も「言わせる」と「言わす」という形が並存しているのだから、発音の面から「言わせて」→「言わして」の変化を音便になぞらえるというこの考えは、連用形だけを考慮にいられたものという問題点を持つことは否定できない。

このように、「言わせて」と「言わして」の関係は、少なくともその文体的な相違という点からは、非音便形と音便形に準じたものということが可能だと思われる。だとすれば、音便形の方に見たてられるサ行五段活用の使役性他動詞がさらにイ音便を起こす意味はあまりなかったということになるであろう。これが③の傾向性に対する、小稿の筆者の見解である。もちろんこの解釈は、サ行五段活用動詞全体について、なぜ音便形を持たない（あるいは音便形が衰退した）のかという説明にはならない。適用できるのは、あくまで「未然形＋助動詞」出自の使役性他動詞に対してのみである。

3 サ行五段活用動詞と他動性

3-1

このように、先行諸研究、および小稿のここまでの検討の段階では、五段活用動詞の中においてサ行活用動詞だけが音便形を持たないことに対する説得力のある解釈が提示されているとはいえない。1-1や1-2で述べたように、サ行五段活用動詞だけが、音便を起こしても“融合の指標”にはなり得ないとか、あるいは非音便形と並存していた時代にも“自己の社会的な位置づけ”のために必要とされる多様な言語手段の一つとして働くことができなかったということはないはずである。そうだとしたら、次の段階の考察としては、サ行五段活用動詞に音便形が存在しない（衰退した）のは、音便形を持つことによる効果を放棄してまで回避しなければならないような、何らかの不都合が、少なくとも五段活用動詞の中ではサ行動詞に限って存在するではないかという方向でおこなわれるべきであろう。

音便を起こすことによるデメリットとしては、まず2-1で述べたような「同音衝突」の問題がある。現代語でサ行五段活用動詞にイ音便が起ったとした場合に、カ行五段活用動詞との間で衝突を起こす例は先に挙げた。これに対して、イ音便を起こしてもカ行動詞との間の衝突が問題にならない語の数は、複合動詞や漢語動詞、使役性他動詞を除いて約100語あり、少なくとも数の上からは後者に対する前者の比率はわずかといえる。そして、これもすでに述べたが、

ワ行とラ行とタ行の促音便によっても、マ行とバ行の撥音便によっても実際に衝突が起こっているわけであり、イ音便によって衝突する語と、促音便、撥音便によって衝突している語との間に、量的にも、質的にも情報伝達機能上の障害としての有意的な差があるとはいえないであろう。もし、仮にそれがあるというのであっても、カ行かサ行の一方がイ音便以外の音便を起こすことによって、音便形同士の衝突をさけることもできるはずである。同じ行に活用する動詞でも方言によって音便の種類に違いがあること、カ行五段活用動詞である「行く」が促音便化している例などからもわかるように、音便の種類は活用する行によって音声学的な必然性があって決定するというものではないからである。

このように「同音衝突」という障害は、少なくともただそれだけでは、サ行五段活用動詞にだけ音便が存在しない、あるいは衰退したことの理由としては弱すぎ、これ以外の別の説明が必要だと思われる。

3-2

小稿の筆者には、「サ行に活用する動詞は他動詞である」というような、漠然とした言語直感があったため、この点を現代語について調査してみたところ、次のような結果を得られた⁷。

〈サ行五段活用動詞のうちわけ〉

有対他動詞… 7 4	有対自動詞… 0
無対他動詞… 2 9	無対自動詞… 3
両用動詞… 1	

例えば「通す」と「通る」のように、形態的、意味的、構文的に対応する相手を持つ動詞を、それぞれ有対他動詞、有対自動詞とよび、対応する相手を持たない動詞を無対他動詞（例・「犯す」）、無対自動詞（例・「目指す」）とよぶ。両用動詞とは自動詞、他動詞が同形のもので、サ行五段活用動詞の中では「増す」の1語である。

上の調査結果からわかるように、サ行五段活用動詞は、それが有対であれ無対であれ、ともかくほとんどが他動詞ということがいえる。例外は無対自動詞の3例（「うつぶす」「きたす」「めざす」）だけである。それでは、他の行に活用する五段動詞には、自他という点でサ行活用動詞のような傾向性がみられるだろうか。

〈表〉 五段活用動詞の活用する行と自他の関係（現代語）

	カ行	ガ行	サ行	タ行	ナ行	バ行	マ行	ラ行	ワ行
他動詞	3 0 (5) (25)	1 2 (4) (8)	1 0 3 (74) (29)	7 (0) (7)	0	5 (0) (5)	3 2 (2) (30)	7 7 (15) (62)	5 0 (0) (50)
自動詞	5 0 (15) (35)	1 0 (1) (9)	3 (0) (3)	4 (2) (2)	1 (0) (1)	8 (4) (4)	4 6 (18) (28)	1 4 9 (73) (76)	2 3 (6) (17)

〈表〉は現代語の五段活用動詞の活用する行と自他との数的関係をまとめたものである⁸。ただし、この〈表〉の中のサ行五段活用動詞には、いわゆる使役性他動詞は含まれていない。〈表〉をみると、前述の通りサ行動詞はほとんどが他動詞といえるが、それ以外の行には、そのような一方的なかたよりは指摘できないことがわかる。例えば、ラ行動詞は自動詞が他動詞の2倍程度あり、ワ行動詞はその逆で他動詞が多い等の傾向はあるが、これらにしても小数派の方にもかなりの数の動詞が所属しており、サ行動詞と同等には扱えないと思われる。つまり、動詞の自他をその活用する行との関係でみた場合、五段動詞では、サ行動詞だけが他の行に活用する動詞と違って、他動詞に一方的にかたよっているということがいえるであろう。問題は、この事実とサ行五段活用動詞だけに音便形がないという事実とを関連づける説明が可能かどうかという点にある。

さて、サ行五段活用の他動詞の中で多数を占める有対他動詞について、自動詞との対応のありかたの主なものを形態上から7種類に分類して示すと次のようになる。

	他動詞	自動詞	
①	o t <u>o</u> s - u	o t <u>i</u> - r u	o s : i
②	n o b <u>a</u> s - u	n o b <u>i</u> - r u	a s : i
③	t u k <u>u</u> s - u	t u k <u>i</u> - r u	u s : i
④	k o g <u>a</u> s - u	k o g <u>e</u> - r u	a s : e
⑤	k a k <u>u</u> s - u	k a k <u>u</u> r e - r u	s : r e
⑥	u t <u>u</u> s - u	u t <u>u</u> r - u	s : r
⑦	u g o k <u>a</u> s - u	u g o k - u	s : ϕ

例えば、①の他動詞「落とす」と自動詞「落ちる」の場合、両動詞の違いを形態上支えているのは o s : i の対立ということになる。いま、他動詞と自動詞の意味的な差異をいわゆる『他動性 (transitivity)』の有無という点に求めると

すれば、サ行五段活用他動詞については、それが『他動性』を持っていることを形態面で保証しているのは、①～⑦に共通する、動詞の語幹末という環境に現れるsの働きであるというようにまとめることができよう。先に示したように、サ行五段活用動詞だけはほぼ全てが他動詞ということができ、その『他動性』は語幹末子音sによって表示されているということは、この活用形に属する動詞は、①～⑦のような有対他動詞だけではなく無対他動詞も含めて、『他動性』という意味原型に形態的に対応する部分（語幹末のs）と、個別の語彙的な意味を表す部分とに、一貫した形態上の分化が成立しているということがいえるのである。この点は他の五段活用動詞にはないサ行五段活用動詞だけの特徴といえよう。

3-3

3-2では、サ行五段活用動詞の語幹末子音sがもつばら『他動性』の表示を行うものであることを述べたが、これは、2-2で述べたところの動詞未然形+助動詞「せる」という言語形式と、それから変化したといわれる使役性他動詞（「言わす」「歩かす」等）、および一般のサ行五段活用他動詞との連続性を裏づけるものである。「歩かせる」と「歩かす」とは、文体的な差異をのぞけば同じ意味である。「歩かせる」は「歩く」という動詞に、『使役性』という意味原型を形態的に表示する「せる」という助動詞がついたものというふうに一般には分析される。一方この「歩かせる」と同じ意味を持つと思われる使役性他動詞「歩かす」の方は、これを例えば他動詞「取る」のように、語彙的な意味の表示部分と『他動性』の表示部分とが形態的に未分化な動詞と考えるよりも、「歩く」+（『使役性』表示部分の）「す」（厳密には語幹末のs）のようにとらえるほうが言語直感に合致しているといえよう。そしてこの使役性他動詞「歩かす」と、「歩く」との形態的な対応関係は、3-2で示した、サ行五段活用の有対他動詞：それに対応する自動詞の対応パターンの中の⑦（「動かす」：「動く」）と同じである。

⑦「動かす」 u g o k a s - u : 「動く」 u g o k - u s : ϕ

「歩かす」 a r u k a s - u : 「歩く」 a r u k - u s : ϕ

要するに、サ行五段活用他動詞「動かす」の語幹末のsは、使役性他動詞「歩かす」の語幹末sと共通の機能、ひいては助動詞「せる」と共通の機能を有するものということである。助動詞「せる」は「せ・せ・せる・せる・せれ・せろ」と活用するので、各活用形に共通する形態はseとすると、これは語幹末

母音の直前に s を持つということになり、次のように図式化することができよう。

「歩かせる」の s (e) = 「歩かす」の s

「歩かす」の s = 「動かす」の s

「動かす」の s → サ行五段他動詞語幹末の s

「助動詞」「使役性他動詞」「(普通の) 他動詞」などという用語による区分を取りはらってみれば、動詞の語幹末(あるいは語幹末母音の直前)にサ行子音を持つ語は、典型的に『ある物からある物への働きかけの意味を持つ』動詞であるということである。

さて、サ行五段活用動詞に音便が起こるとすれば、それによって損なわれる部分は、イ音便であれば語幹末の s、その他の音便であれば語幹末の s および連用形活用語尾の i である。つまりはどの種類の音便であっても、『他動性』を表示する機能を持つ語幹末のサ行子音 s は失われるということになる。逆にいえば、サ行五段活用動詞だけに音便が起こらないのは、『他動性』を表示するという助動詞的な機能を持つ、この語幹末の s を保護するためということができるのではないだろうか。

2-2 で述べた「歩かせて」:「歩かして」の両形は、ともに語幹末のサ行子音(『他動性』の形態面での表示)を保持したままで、例えばフォーマル:インフォーマルというような文体的な差異を相手との対比において表現し得る存在としてとらえることができるであろう。

3-4

小稿では 3-2、3-3 における検討を通して、サ行五段活用動詞だけが音便形を持たないことに関して、『他動性』の形態面での表示機能を維持するためという説明を与えた。この結論を導くにあたっては、調査対象、用例など現代語だけを念頭において考察を進めてきた。すなわちこれは、現代語の五段活用動詞は、連用形に「て」や「た」が後接する場合、必ず音便を起こす中において、サ行五段活用動詞だけが例外的に音便を起こすことがないことに対する説明ということになる。現代語の(サ行以外の)五段動詞連用形は、「て」と「た」が後接する場合は音便形が、それ以外の場合は非音便形が規則的に対応するというように、異形態による機能分担が確立している。しかし、サ行五段動詞だけは、機能分担の確立によるメリットを放棄してでも、『他動性』の形態面での表示機能を維持する方を優先させていると解釈すべきなのである。この説明は、

過去の日本語の少なくともある方言の、少なくともある種の文体の中に存在したサ行五段活用動詞のイ音便が衰退、消滅の方向をたどったという歴史的な事実をも同時に説明できるものであろうか。

過去の日本語の動詞の音便のありかたは、サ行五段動詞のイ音便に限らず、音便形と同じ環境に非音便形も出現し得たのであり、この音便形と非音便形は文体的な価値という点で対立していたのである。この点が現代語との重要な違いといえる。そして、時代の流れと共に、サ行以外の動詞の音便形が、非音便形との機能分担を目指して規則的な出現をするようになり、それとともに(あるいはそれと引き換えに)音便形：非音便形の対比の上に成立していた文体的な価値の表現能力を失ったわけである。新しい言語形式が生まれた時には、それに必ず付随する文体的な価値(→自己の社会的な位置づけに利用できる)が、この形式が広まるための原動力となるのだが、この文体的な価値の表現能力というはたらきは、その形式の存在を永久に保証するものでは決してない。なぜならば、自己の社会的な位置づけという目的は、言語という範囲にその手段を限ってみても、様々なレベルの様々な形式においてその達成が可能なものであり、何かの事情のために一つの言語形式による表現を放棄しても、別の形式によっていくらかでも代替可能だからである。この何かの事情とは、動詞連用形の音便の場合は、「て」や「た」が後接するものとそれ以外との機能の分担によって、情報伝達の効率を向上させるという目的の存在ということができよう。

現代語では、一般には音便の範疇にいれられることはないが、例えば先に述べた「歩かせて」→「歩かして」のほか、林(1985)にも指摘されているような「僕のうち」→「僕んち」、「行ってしまった」→「行っちゃった」等の「音便的」な現象が、文体の多様性を維持するための手段のひとつとして活躍している。

情報伝達の効率向上のために、非音便形との対立を前提として可能であった文体的な価値の表現能力を放棄するに際して、サ行五段動詞だけは、他の五段動詞と同じ行動をとるわけにはいかなかった。サ行五段動詞は、おそらく現代語に限らず、語幹末(付近)にサ行子音を持つ助動詞や使役性他動詞などと類型をなして、『他動性』という意味原型を形態面でも積極的に表示しているのであり、それは非音便形でなければならない。音便形が消滅して非音便形に統一されることのメリットは、この機能を放棄して(つまり音便形で統一して)他の行の五段動詞と音便の起こし方を合わせることによる規則性の維持というメリッ

トを上回るものだったということであろう。

おわりに

小稿では、サ行五段活用動詞のほとんどが他動詞であるという点に着目して論を進めてきたが、その逆、つまり他動詞はサ行五段活用動詞であるということはもちろんできない。サ行五段活用動詞が、音便という現象に関して他の五段活用にみられる規則性に反してまで、『他動性』という意味原型を形態的に表示するという機能を果たそうとしているのであれば、サ行五段以外の他動詞も、同様に何らかの方法で『他動性』を形態的に表示しているはずであり、またそれを犯そうとする現象があっても抵抗しているはずである。小稿の筆者は、この点と現代語に一段活用と五段活用が存在する意義、また、一段活用に音便が起こらないこと、さらには中世日本語に起こった終止形、連体形の統合の意味などを関連させて考えていくことができるように思う⁹。

さらに、述語の持つ『他動性』という意味原型は、統語的には、ヲ格をとるということによって表示されているのに、その上さらに形態的にもそれを保証することが、どれほど必要、あるいは有効なことといえるのか、原則として自動詞と他動詞の形態的な差異を持たない言語が多いことを考えあわせるとき、この問題も、あるいはこの問題こそが非常に重要であると思われるのであるが、この点に関しても、後稿に譲ることにする。

〈注〉

- 注1 「音便」という術語をどのような言語現象に適用するかは、研究者によってその適用範囲に違いがあるが、小稿で取り扱う「音便」とは、動詞の連用形に特定の語がつく場合に起こるものだけであり、それ以外のどの範囲までを「音便」に含めるかという問題には立ち入らない。
- 注2 ただし、サ行五段活用動詞のイ音便は、他の行の五段活用動詞の音便よりも時期的にやや遅れて発生したものといわれている。
- 注3 ただし、東国方言には、はじめからサ行五段活用動詞のイ音便は存在しなかったという主張もある。
- 注4 ここでいう「自己の社会的な位置づけ」とは、1)、2)、3)をすべて含み得る行為としてとらえている。2)の聞き手との関係をどのようにとらえているか、とは別のいい方をすれば、『自分是你との関係をかくかくのごとくにとらえているそういう人間である・そういう人間としてみてほしい』ということの表

明であるし、3) 当該の発話場面のとらえかた、とは『自分は今のこの場面を例えばこれこれの程度に形式ばった、あるいはうちとけた場面だと認識しているようなそういう種類の、あるいはそういう主張を持つ人間である・人間としてみてほしい』ということの表明といえる。

注 5 1990年度学習院女子短期大学国語国文学会公開講演会での「音便の価値」と題した口頭発表、および発表資料。

注 6 橋本（1962）、奥村（1968）、北原（1973）、柳田（1985）など。

注 7 この調査は、宮島（1972）巻末の語彙索引を用いて行った。動詞の未然形＋使役の助動詞「せる」と交替可能ないわゆる使役性他動詞は含まれていない。

注 8 注 7 と同様。

注 9 坪井（1990）では、「終止形連体形の統合」および「二段活用的一段化」に関して『活用の型の単純化』と『各活用形態の示差性の実現』という二つの原理に貫かれた現象であると述べられている。このうち『各活用形態の示差性の実現』という考え方は、小稿の筆者の立場と共通点を持つものと思われる。

〈引用文献〉

奥村三雄（1968）「サ行イ音便の消長」『国語国文』

北原保雄（1973）『きのふはけふの物語 研究及び総索引』笠間書院

小松英雄（1975）「音便機能考」『国語学』101

こまつひでお（1981）『日本語の世界 7・音韻』中央公論社

坪井美樹（1990）「終止形連体形の統合と二段活用的一段化」『文芸・言語研究・言語篇』17 筑波大学 文芸・言語学系

橋本四郎（1962）「サ行四段活用動詞のイ音便に関する一考察」『国語国文』

林史典（1985）「何のために国語史を教えるか」『応用言語学講座 1』明治書院

宮島達夫（1972）『動詞の意味用法の記述的研究』秀英出版

柳田征司（1985）『室町時代の国語』東京堂出版